

企業年金資産運用の新しい視点

大輪 秋彦

目 次

- | | |
|--------------------------------|-------------------|
| 1. はじめに | 4. 企業年金の資産運用からの視点 |
| 2. 確定給付型企業年金制度の目的と資産運用 | 5. 終わりに：新しいチームワーク |
| 3. 制度加入者・受給者、企業年金運営者と制度提供企業の関心 | |

確定給付企業年金を取り巻く最近の、あるいは今後に予想されるさまざまな環境の変化は、確定給付企業年金の資産運用に大きな試練を与える。本稿では、このような状況に対応し、確定給付年金制度の維持・発展向上に資するために確定給付企業年金の資産運用は何をなすべきかを検討する。確定給付企業年金の資産運用が本来持つ役割は何かという原点に立ち戻り、その役割を安定的に果たすために考慮すべき事項の再確認から始めたい。

1. はじめに

わが国の確定給付型企業年金（以下、「企業年金」）は、2007年・08年と残念ながら2年連続でマイナスの資産運用リターンを経験した。特に08年は、わが国の企業年金資産運用の歴史上、最悪の落ち込みとなった。しかしながら、あえて誤解を恐れずに言えば、運用関係者にとって、この最悪の数字よりもショックだったのは、いろいろ

な工夫を積み重ねながら推進してきたはずの「分散投資」が、狙い通りに機能しなかったことだったのではなかろうか？（注1）

投資環境は、09年3月中旬以降、最悪期は脱したかの感はあるものの、残念ながら、とても安心できるような状況にはないというのが現状であろう。

米国サブプライムローン問題に端を発した、世界的信用収縮・流動性収縮がもたらした市場の動



大輪 秋彦（おおわ あきひこ）

日本アイ・ビー・エム株式会社 財務 年金担当。1975年、日本アイ・ビー・エム株式会社入社。財務、計画、リース部門等を経て現職。企業財務協議会と経団連の年金関係の委員会・ワーキング・グループ委員、国民年金基金連合会の資産運用委員会委員、企業年金連絡協議会DC検討会座長を務める。監訳書にDavid F. Swensen, *Pioneering Portfolio Management*（『勝者のポートフォリオ運用』、金融財政事情研究会、2003年）、共訳書にAnton van Nunen, *Fiduciary Management : Blueprint for Pension fund Excellence*（『フィデューシャリー・マネジメント』、金融財政事情研究会、2009年）がある。